

II-1-1 国語科

(1) 研究テーマと仮説 古典B〈漢文〉先従隗始 『戦国策』と『十八史略』の本文異同を読む

漢文の『戦国策』と『十八史略』は、同じエピソード「先従隗始」を扱っているが本文が大きく異なっている。この二つのテキストを読み比べて本文異同から各テキストの独自性や、改作の意図について考察する。この二つの漢文テキストを読み比べる学習は、本文異同を通して本文の性質や表現を「問う」ということに収斂されていくであろう。

(2) 実践

ア 実施日時 令和5年1月18日(水) 2限

イ 実施場所 全日制普通科 2年C組(SSHクラス)

ウ 参加生徒 生徒37人

エ 行程 『戦国策』の〈先従隗始〉は授業で既習済み。『十八史略』の〈先従隗始〉は事前学習課題(Googleclassroomで配布)。

オ 実施内容

学習活動	指導上の配慮事項など	評価・方法など
【生徒の立場】	○【指導者の立場】	
『戦国策』と『十八史略』を読み比べて、グループで交流する。		
<p>1〈導入〉個人ワーク(PC) MetaMoJiClassRoomで回答。 『戦国策』と『十八史略』を読み比べて本文異同について気付いた点を箇条書にする。</p> <p>2〈展開〉グループワーク グループ内で各メンバーの気付いた本文異同について話し合い、Googleスライドに記入する。</p> <p>3〈まとめ〉グループワーク 『戦国策』の独自性と『十八史略』の改作の意図を考察する。その後、Googleスライドにまとめる。</p>	<p>○比較しやすいように便宜上、『戦国策』と『十八史略』の本文の対応箇所を、それぞれ【A】・【B】の二つの場面に分け、比較の観点を示す。</p> <p>○自分一人では気付かなかった本文異同について、グループ内の交流を通して気付かせる。</p> <p>○『戦国策』にはなくて、『十八史略』にはあるものはなにか。また、その逆に『戦国策』にはあるが、『十八史略』にないものはなにか。本文の省略と増加に注目させる。そして『戦国策』の独自性や、『十八史略』の改作の意図に気付かせる。</p>	<p>○生徒がMetaMoJiClassRoomで回答したものを点検。</p> <p>○読み比べを通して本文の異同に気づき、それぞれのテキストの独自性や、改作の意図を分析している。生徒がグループごとに提出したGoogleスライドの点検。</p>

(3)評価 SSHアンケート(国語「問う力」に関するアンケートによる)

ア ①参加生徒の反応

この授業を通じて、次のことはどれくらい増えましたか？



②参加生徒の感想(一部抜粋)

- ・同じ出来事を書いた文書でも、筆者が違くと書いてあることが異なる。そのような文章を読むことで登場人物や出来事について多角的な見方をすることができ、より深く理解することができると思った。
- ・同じような話なのに、付け足しや省略があるという事について、なぜそのようなことになったのか、何を重視した文章なのか、それぞれ考えることができた。
- ・どちらも内容はあまり変わらないのに、説得力や作者の視点が違っていておもしろかった。今回の漢文に相違点があったことは、英文が、翻訳した人によって全く表現の仕方が違うことに似ていると思った。
- ・改作した人には理由があって、文章をより良くしようとしていることに気がついた。また、いくら考えても真意が分からないところも面白いと思った。普段の授業よりも深く考える内容であって楽しく受けることができた。

イ 考察

本校では、「問う力」を「有って欲しいのに無いことに気づく力」と定義している。今回の授業実践は、従来型の漢文授業に見られる書き下し文や句形、現代語訳を中心とする授業とは大きく異なる。すなわち二つのテキストの本文異同に着目し、各テキストの独自性や、改作の意図を考察する点にある。国文学研究における「異本文学論」の手法を漢文に応用したものである。アンケートの結果が示すように、生徒は今回の読み比べの授業で、漢文テキストの本文異同に着目し、新たに「問う力」を考え、深めることができたことと思う。

ウ 今後の課題(「問う力」を育むための授業構想に向けて)

SSH 指定校である本校における国語科の位置づけは、いわゆる人文科学であろう。すなわち既存のものを批判的に越えていくアカデミックな新しい授業スタイルを指向していかなければならない。今回の教育実践の内容は、私の大学院(修士・博士)時代の「物語の本文研究」の一端によるものである。今後も、教育実践を通して国文学・漢文学研究と国語科教育を融合させた新しい授業スタイルの構築を目指していきたい。